

# 「天保義民」事件に見る酒井藩と領民の絆

ふとしたことで、『荘内天保義民物語』という和装本を我が家の書棚の奥から見つけた。昭和46年6月1日の発行で、読書好きの方はお気づきであろうが、藤原周平の時代小説『義民が駆ける』の内容である。周平の小説は、昭和51〜52年（1976〜77年）に中央公論の『歴史と人物』に連載されたというので、写真の『義民物語』の方が5年ほど早い。編者大井五郎、印刷所富士印刷、発行所阿部久書店とある。ともに物語の地、鶴岡市の面々である。

酒井藩主は忠器（ただたか）公籠訴は翌年正月20日に、別に出掛けた11人が決行した。命がけの行動であり、井伊、水野、太田、脇坂、中山の五家に分かれて訴えた。幸い罰則はなく、「明日、国元に帰るの大群勢で行進した里郷も現れよう」と下された。また別の農民が正月24日に立出、別経路で2月6日に江戸に着き、2月9日に駕籠訴嘆願した。この時は、井伊、水野、堀田、土井、太田の五家に訴えた。この時も無事に帰国が許された。こうした動きを江戸城下でも把握し、転封を企てた謀った水野越前守が、庄内出身の佐藤藤左衛門に、2月16日に8名の農民が江戸に向かった。道中15日、3月1日に牛込の寺に投宿。江戸でも警戒が始まったので、16日に6家に駕籠訴が決行できた。無事4月5日に帰郷している。

## 国替え取り消しを求め、領民が何度も江戸表に直訴

さて、『荘内天保義民物語』は、天保11年11月7日、江戸から早馬が鶴岡に到着した」と始まる。まさに今の時節の出来事である。この報せは「今度、酒井左工門尉を越後長岡へ転封する」というものであった。酒井、榊原、井伊、本多の徳川四天王の酒井家が庄内治世200年、なにゆえに長岡へ転封を命ぜられたのだろうか。

「天保11年11月7日、江戸から早馬が鶴岡に到着した」と始まる。まさに今の時節の出来事である。この報せは「今度、酒井左工門尉を越後長岡へ転封する」というものであった。酒井、榊原、井伊、本多の徳川四天王の酒井家が庄内治世200年、なにゆえに長岡へ転封を命ぜられたのだろうか。

## 西郷の「敬天愛人」が広まるきっかけに

「天保11年11月7日、江戸から早馬が鶴岡に到着した」と始まる。まさに今の時節の出来事である。この報せは「今度、酒井左工門尉を越後長岡へ転封する」というものであった。酒井、榊原、井伊、本多の徳川四天王の酒井家が庄内治世200年、なにゆえに長岡へ転封を命ぜられたのだろうか。

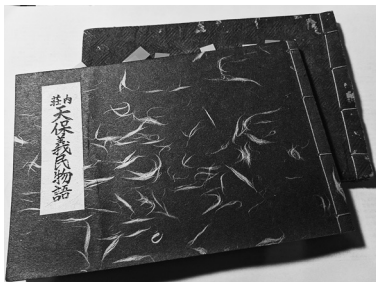
## 地元力発見!!

佐藤建吉 「洗楓座」代表

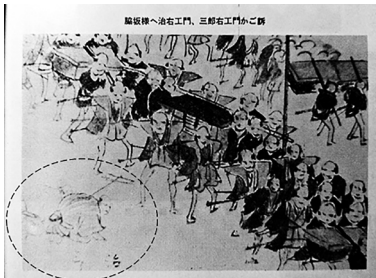
②4

役人に取り押さえられ、帰国させられた。最初の駕籠訴をする農民

最初の駕籠訴をする農民



上) 和装本の『荘内天保義民物語』  
下) 駕籠訴をする農民



湯殿山へ参詣の外来の人には枇杷葉湯と草鞋一足の接待をした。その数は3千人近くにまで達したと

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。全国ふるさと大使連絡会議「理事」

ある町史には、「天保義民ともいわれるこの藩主転封阻止の運動の過程に於て、時には藩主の命に叛く辛さであった。……将来功に誇り、藩主の命に叛くが如き肝煎は絶対誠しめねばならない。……と血判をした郷民もあつた」と残されている。藩主と大衆との関係は、明治維新まで続いた。西郷隆盛の「敬天愛人」を広めるきっかけになった端緒もこの物語に結びつく。

ついに、410名からなる大群の嘆願計画も出来た。複数のグループに分かれて江戸に上る手はずとなり、一部のグループは出発した。こうした動きを江戸城下でも把握し、転封を企てた謀った水野越前守が、庄内出身の佐藤藤左衛門に、2月16日に8名の農民が江戸に向かった。道中15日、3月1日に牛込の寺に投宿。江戸でも警戒が始まったので、16日に6家に駕籠訴が決行できた。無事4月5日に帰郷している。

現在の生き様にも通じる。